

一膳出順 一、本膳出シ勝手口シメル、二、カウノ物カ平皿カ、此所ニテ平皿出ストキハ、香ノモ
合スカ重筥
ニテ出ス、三、食鉢汁カへ、四、中酒出シ、引盃ニテ廻ス、銚子引、五、焼物、但シヤキ物
無時ハ平皿六、食鉢
汁カへ、七、酒出シ上客ニ渡ス、勝手口ニテセウバンノ挨拶有テ、勝手口シメル、八、吸物出シ平
皿引、九、銚子硯蓋持出酒ヲス、メ、挨拶有テ引事常ノ如シ、十、湯出シ吸物椀引、勝手口シメル、
但シ湯トウ、爐ノ時ハ湯ノコスクヒ入蓋致シ出ス、風爐ノ節ハ、カナイロニテ蓋ナシニ出ス、シ
バラク盆ニテ湯トウ食鉢モ引、十一、本膳ヲ引、口シメル、十二、菓子出シ勝手口シメル、但シ
風爐ノ時ハ膳ヲ引キ、直ニ炭ヲ致シ、菓子出シ口シメル、菓子出炭ヲ仕テモ吉、
〔茶傳集 十二〕一ある時道安、利休に茶の湯仕候、其前日利休セントウニ入、歸ニ道安方へ立寄候而
申様、錢湯に入れて咽乾キ候故立寄候、茶を給度と申、道安其時錫の茶碗にて食を持出、利休ニ給さ
せ、炭を置、釜を上ゲ、水を入替、長圍爐裏に炭火澤山におこし、鮭の魚を持出、利休見申前にて殘ら
ず切ル、利休申は、別に客もなきに、皆切事如何と云、御相伴に女ナ子召使のものにも給させ可申
迎、不殘焼て下々へも給させ、其後茶を立申、利休不及心とて感シ申、初鮭にて、明日の茶湯に、是
種にて懷石出可申と存調候へ共、今日の客被參候に、不出候へば、數寄の道に、不入候とて、明日の
懷石に如何にも取あへず料理て、今日の茶の湯仕事、數寄の意なりと仰なり、
〔明良洪範 九〕片桐石見守モ、茶事ハ衆ニ勝レシ人也、會席モ上手ニテ、輕キ品ヲ出サレテモ、風味至
極宜シ、諸人片桐ニ效ヒテ料理スレドモ、風味中々及ズ、或人片桐ニ料理ノ仕方ヲ問フ、片桐答テ、
渾テ料理ハ輕キ料理ニテ、風味ヲヨクセント思ハ、マツ重キ料理ヲ拵ヘ、其重キ内ヨリ出タル
輕キハ風ウミ宜也、最初ヨリ輕ク拵ヘテハ、龜末ニ成テ、客ニハ出サレズト云ヘリ、
〔槐記〕享保十一年正月廿八日、參候、先日ノ左典、厩ガ茶ニ、一ツノ仕損ジアリ、氣ガ付タルヤト仰ラ
ル、○近衛
家照會テ氣付申サヌヨシヲ申ス、花ガ欸冬ノトウナルニ、吸物ニフキノトウハ指合也、コト